Universiteit
Leiden
The Netherlands

Landscape theory: post-68 revolutionary cinema in Japan

Hirasawa, G.

Citation
Hirasawa, G. (2021, September 28). *Landscape theory: post-68 revolutionary cinema in Japan*. Retrieved from https://hdl.handle.net/1887/3243318

Version:	Publisher's Version
License:	Licence agreement concerning inclusion of doctoral thesis in the Institutional Repository of the University of Leiden
Downloaded from:	https://hdl.handle.net/1887/3243318

Note: To cite this publication please use the final published version (if applicable).

要約

“Landscape Theory : Post-68 Revolutionary Cinema in Japan”

Go Hirasawa

本論文は、1969 年後半に映画批評家でありアナーキストの松田政男によって提起され、映画監督の足立正生、脚本家の佐々木守、写真家の中平卓馬らによって理論展開され、大きな論争を巻き起こしていった風景論を検証している。日本で風景という用語とその概念が最初に用いられたのは、19 世紀後半の明治維新における近代化の過程で西洋から landscape の翻訳語として風景が導入されてからであった。その前史として、光景や景色など様々な用語が同じ意味で使われていたが、西洋的な風景が定着すると、様々な分野で風景、および風景論についての議論が開始されていくこととなる。こうした日本における風景論史のなかにおいて、本論は松田、足立、佐々木らによって集団制作された『略称・連続射殺魔』（1969）という映画作品を契機として生み出された風景論を対象としている。この作品は、1968 年 10 月から 1969 年 4 月にかけ、東京、京都、函館、名古屋で発生した無差別の連続射殺事件の犯人である 19 歳の永山則夫が、生まれてから逮捕されるまで、流浪しながら見て来たであろう風景のみで構成された不在の主人公をめぐるドキュメンタリー映画である。この事件は、逮捕された永山が高度経済成長下の日本において、「金の卵」ともてはやされ、地方から出稼ぎにやってきた若年労働者であったことから、戦後の日本に大きな衝撃を与えた。松田らは、実際に永山が歩んだ道のりを辿るなかで、新たな風景を発見していったのである。永山の逮捕を受けた 1969 年の 7 月に撮影が開始され、69 年末に完成している。

第二次世界大戦後の日本は、侵略戦争の責任問題が問われないままに、アメリカの占領下において新たな体制が築かれていった。そうした諸問題が 1960 年における日米安保闘争によって大きく顕在化して新左翼運動を生み出し、さらに 1968、69 年における学生を中心とした全共闘運動が、既存の国家—資本主義体制を解体する直前にまでいたった。こうして 1960 年代は戦後における大きな転換期となったのだが、1970 年代を迎える前後から、圧倒的な警察—軍事力によって抑え込まれ高度消費社会の到来を迎えていく。こうした時代状況の変化のなかで、映画論や写真論を契機としながら、既存の芸術論、革命論の継承ではなく、「1968 年」以後における新しい思想を目指して生み出されたのがここで論じる風景論であった。この風景論は、象徴的な政治的空間ではなく、何の変哲もない日常的な風景のなかにこそ、権力—国家を見出そうとするものであった。これまでの目に見える風景を対象としていた論をより広義に解釈し、視覚的のみならず不可視な構造をも風景と名指したのである。しかし、1970 年代における新たな権力—国家論、革命論として大きな可能性をはらみなが

ら理論的な変更を余儀なくされることとなった。本論文では、映画、写真、政治を問わず党派的な批判による多くの論争や、ある種の風景論ブームが生まれたことで、いわゆる大文字の歴史的な風景論が回帰していった背景、また 1974 年に足立がパレスチナ革命のために日本赤軍に合流すべく日本を離れ、同年に松田が欧州に拠点を移そうとするが国外退去となり、中平が記憶と言葉を失うといった出来事などの経緯をたどることで、日本で生みだされた新たな風景論の歴史的、理論的な位置づけを明らかにするとともに、その現在的な可能性も問い直すものである。

Introduction では、2000 年に足立がレバノンから日本に強制送還されたことから始まる足立正生の日本国内外での再評価、また風景論の再検証の潮流について触れている。

一章の「風景と風景論」では、日本における近代化の過程で風景という概念が定着していく過程を辿り、その後、どのように議論されていくかを検証している。1894 年に出版された地理学者の志賀重昂『日本風景論』から始まり、同じく地理学者の内村鑑三の『地人論』、民俗学者の柳田國男による一連の紀行文、哲学者の和辻哲郎『風土』など、文学者の国木田独歩『武蔵野』など、その内容は多岐に渡る。本章では、それらにこれまで風景論の文脈ではあまり論じられてこなかった映画監督の亀井文夫、溝口健二、文学者の太宰治、坂口安吾、批評家の保田与重郎、花田清輝らの風景に関する記述を加え、地理学、哲学、民俗学、社会学、写真論、映画論、文学、国家論から文化論にいたるまで、日本における風景および風景論の歴史的、理論的な変遷をたどっている。そして、それらとの比較から松田らの風景論の独自性や革新性を明らかにしている。

二章の「松田政男：風景論」では、風景論の中心的なイデオローグであった松田のテクストを検証している。風景について最初に理論化した「風景としての性」、「風景としての都市」を中心に、大島渚の『東京戦争戦後秘話』（1970）などの映画論から文化論、政治論にいたる議論のなかで展開された風景論について分析している。東京と地方、中央と周縁といった二項対立の失効、巨大な都市としての日本列島全土の画一化、風景の均質化、見る／見られると主体の関係性などを鍵概念に提起された権力—国家論、下層プロレタリアート論、コミューン論、ゲリラ論、革命論の可能性を明らかにしている。そして、松田風景論への中平、足立、佐々木らによる理論的応答とともに、映像作家の原将人、批評家の津村喬らによる批判に触れながら、風景—風景論論争にまで発展した経緯とその衰退過程を辿っている。また同時代における文学者の奥野健男、建築家の宮内康、原広司の風景について議論、松田らの風景論以後に書かれた文学者の柄谷行人らによる新たな風景論についても論じている。さらに、風景論の理論的な継承とされている報道論—メディア論とそれらと並行して展開されていた映画運動論についても言及している。

三章の「足立正生論」では、風景論を生み出す契機となった『略称・連続射殺魔』、そして若松プロダクションが製作し、共産主義者同盟赤軍派、パレスチナ解放人民戦線によって共同編集されたニュース映画『赤軍–PFLP・世界戦争宣言』（71）を中心に検証している。『赤軍』は、実際の演出、撮影、編集は足立によって行われ、世界革命のためのテクストとして、パレスチナ解放闘争と日本の革命闘争が描かれている。最初に、足立を生み出した1950年代後半から1960年代前半にいたる日本のニューウェーブ映画運動の文化的、歴史的背景に触れながら、『略称・連続射殺魔』という作品を分析し、物語や出来事ではなく風景のみを用いた方法論が、視覚メディアである映画の美学的、政治的な可能性を新たに引き出していることについて論じている。また足立による風景論についての発言を、テクストのみならず、インタビュー、対談、座談会のなかから集めるとともに、『赤軍』を契機に生み出された報道論—メディア論への風景論からの理論的展開もあわせて考察している。さらに『赤軍』という作品の映画論的な分析と政治的な分析とともに、『赤軍』の上映隊運動をめぐって、映画理論と制作および上映の関係性についての組織論的な分析もおこなっている。

四章の「若松孝二、大島渚、ジャン＝リュック・ゴダール＆ジガ・ヴェルトフ集団」では、足立、松田と共同していた作家である若松孝二、および大島渚において、風景論と関わりの深い作品を検証している。とくに、若松『ゆけゆけ二度目の処女』（1969）、『狂走情死考』（1969）、『セックスジャック』（1970）、大島渚『少年』（1969）、『東京戦争戦後秘話』（1970）を中心に、それらの作品自体、あるいは風景についての両者の発言を踏まえながら分析している。またジャン＝リュック・ゴダール、およびゴダールとジャン＝ピエール・ゴランらのジガ・ヴェルトフ集団時代の作品において、風景と政治を主題とした作品、『東風』（1969）、『イタリアにおける闘争』（1969）、『ヒア＆ゼア』（1975）を中心に比較することで、日本のみならず、同時代のラディカルな国際的映画人による風景への映画的かつ政治的なアプローチについても考察している。

結論では、これらの検証を振り返りながら、戦後復興という大きな物語が回帰している日本の状況のなかで、再び、それらに対抗するための新たな理論化の課題について論じている。